

氏名(本籍)	滝沢洋平(神奈川県)
学位の種類	博士(体育科学)
学位記番号	甲第82号
学位授与年月日	令和2年3月15日
学位授与の要件	文部科学省令学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	小学校体育授業のベースボール型ゲームにおける児童の技能及びゲームパフォーマンスに関する研究
審査員	主査 日本体育大学 教授 近藤智靖 副査 日本体育大学 教授 岡出美則 副査 日本体育大学 教授 久保健

《論文審査結果の要旨》

本研究は、小学校体育授業の中学年と高学年を対象として、ベースボール型ゲームの授業実践を行い、その学習成果を検証したものである。具体的には二つのことを行っており、一つは、児童の投能力及び打能力及び守備者のゲームパフォーマンスを評価できる方法の開発を行っている。もう一つは、授業として、投能力や打能力の向上を重視した実践(A実践)と状況判断力の向上を重視した実践(B実践)を実施し、その学習成果を検証している。

本論文は主に3章から構成されており、第1章では、分析方法に関する検討を2つ行った。1つ目は、投動作と打動作についての観察的評価基準を作成した。2つ目は、守備者のゲームパフォーマンスの分析基準を作成した。結果として、1つ目の観察的評価基準は、一定の妥当性、信頼性及び客観性を有するものであった。また、2つ目の分析基準も、一定の信頼性及び客観性を有するものであった。

第2章では、A実践を中学年と高学年で実施した。ここでは、投能力と打能力の向上を企図したドリルゲームや守備者の送球を必要としたメインゲームを行った。この結果、中学年及び高学年のいずれも投能力及び打能力及び守備者のゲームパフォーマンスの向上が明らかとなった。また、児童の授業評価も高かったことから、A実践は、ベースボール型ゲームの授業の方向性として有効であると結論づけた。

第3章では、B実践を中学年と高学年で実施した。ここでは、打能力の向上を意図したドリルゲームや、チームでの練習、また、打者の進塁をどこでアウトにするのかという判断を必要とするメインゲームを行った。この結果、中学年及び高学年のいずれも、打能力及び守備者のゲームパフォーマンスの向上が明らかとなった。また、A実践同様、児童の授業評価も高かったことから、B実践も、ベースボール型ゲームの授業の方向性として有効であると結論づけた。

こうした一連の研究の結果、結論として以下の3点が明らかになった。

- 1, 授業を行う教師が児童に何を身につけさせたいのかを決定し、それに見合った活動を設定し、活動の反復を行わせること。
- 2, 児童が身につけた技能をメインゲームでも発揮できるよう、教師は授業を設計する上で、活動

のつながりをもたせること。

3, 児童が授業の中ですぐに習得できる技能とそうでない技能とがあること。

以上が本研究の要旨である。

本研究は、第1学年～第6学年の児童570名という多人数の児童を対象とした調査を実施し、信頼性・妥当性・客観性を有する観察的評価基準づくりを行っている。また、信頼性や客観性の高いゲームパフォーマンスの分析基準を作成している。さらに、過去のベースボール型ゲームの授業実践を振り返り、授業実践を巡る考え方が二つあることを特定化し、このいずれにも着目して授業研究を実施している。この授業に参加した児童も896名にわたっており、こうした大規模で精緻な調査研究は、多大な労力を有するため、これまで十分になされていなかったことを踏まえると、大きな独自性を有するものである。また、本研究で採用された授業の各教材群は今後の学校現場における授業実践に大きな影響を与えるものであり、同時に、得られたデータは、研究者や学校現場の教員がベースボール型ゲームの研究を実施する際の参照基準となりうるものである。よって、本研究は高い評価を与えうるものと考えられる。

最終試験では、審査員より、中学校段階以降の接続を踏まえ、小学校段階でのルール設定、状況判断を高めるための練習、技能の反復と教師の指導の関係性等についての質問がなされた。論者は、今回の授業実践の方法と系統性及び展望を踏まえて、一連の質問に適切に回答をしていた。また、審査員より、個人の学習成果に焦点化した事例研究を進めること等についての意見も出され、今後の研究の発展が期待される場所である。

以上、審査の結果、申請者は博士(体育科学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

《最終試験結果》

合格 ・ 不合格

令和2年1月14日